

福島第一原発事故と「原発回帰」

今日3月11日、東日本大震災・福島第一原発事故から12年になる。「3・11の衝撃」は今でも忘れられない。あの災禍の記憶を忘れるかのように、岸田政権は原発回帰政策を強引に推し進めている。

写真は5年近く前、2018年6月に福島第一原発を初めて視察したときのものだ。宮本憲一先生ご夫妻やゼミの仲間らと、いわきから富岡、浪江、双葉、大熊などを巡り原発構内に入った。茫然と爆発した建屋を見つめる私。当時はまだ構内の線量は高く、バスから建屋に近づいた。



帰路のバスで、参加者が感想を述べたが、宮本憲一先生が次のように締めくくった。「原発が活着している。1～3号機に近づくと、急に放射線量が上がった。まだ危険極まりない状況だ。廃炉に向けて、相当長い時間、技術が必要だろう。原発4基だけで、国土と多くの人の生活を破壊した。このことの意味、被害の大きさを自分の目で確かめること、被害の地域を実際に歩いてみるのが大切だ」



放射線衛生学者の木村真三さんの案内で、原発地域を回って、目に見えない放射線の怖さを実感した。「帰還困難区域」では、人気のない住宅や店舗、時間が止まってしまった街並みに衝撃をうけた。浪江町の山あい一面の柳の木々の群れ。そこは原発事故前には田んぼが広がっていたという。地域の人々の生業、暮らしの場であった。原発から放射線が放出され続け、敷地いっぱいに広がる巨大タンクや設備を見て、原発事故の際限のない困難な作業が実感できた。現場で働く作業員の群れに、事故処理にかかる膨大なエネルギーと費用を垣間見た。原発というものが、いかにコスト面でも割の合わないものかを痛感した。



取り返しのつかない甚大な被害をもたらした福島第一原発事故から12年。岸田政権はウクライナ危機やエネルギー問題に便乗して、原発回帰に躍起になっている。原発の新規建設や再稼働、原発の運転期間の延長など、なし崩し的に原発依存にかじを切っている。そして、漁民や住民の反対の声に耳を傾けず、汚染水の海洋放出が進められようとしている。

南海トラフ巨大地震は30年以内に70～80%の確率で発生すると予測されている。大地震と巨大津波は、決して過去のことではない。「3・11の衝撃」を忘れてはならない。

(2023年3月11日)